パリ・コレに出演するためにパリに来てほしいと招待を受けたときは、最初は躊躇しました。なぜ私が必要なのか、よくわからなかった。“小夜子はそのままでいい”と言われて、心から驚いたほど。オカッパのヘアスタイルで黒髪。西洋的なモデルとまったく異なった私に、“そのままでいい”と言った人はそれまでいませんでしたから。（…）黒髪、切れ長の目、小さい鼻の私の顔は、彼らにとって日本的であり、今までになかった個性だったのです。

第 1 章　時代とともに　――　トップモデルとしての小夜子

杉野学園ドレスメーカー女学院を卒業、服作りの現場に関わりたいと考えた小夜子を最初にプロのモデルとして起用したのは、山本寛斎である。1971 年、彼のロンドンでの日本人初のショー成功を受け、西武デパート内のアヴァンギャルドなショップ「カプセル」店内で開催された凱旋ショーだった。1972 年にはザンドラ・ローズの東京でのショーのメインに抜擢されたことをきっかけに、ジャン＝マリー・アルマンというオートクチュールのパリ・コレクションに出演。翌 1973 年には、三宅一生初のパリ・コレクションに出演。以後、高田賢三をはじめとする日本人デザイナーの進出と歩みを同じくするように、瞬く間にトップモデルに駆け上がり、翌 1974 年には『ニューズウィーク』誌で「世界の 4 人の新しいトップモデル」と称されることになる。イヴ・サンローラン、クロード・モンタナ、ティエリー・ミュグレーなどのショーのほか、カステルバジャック、エンリコ・コーベリ、ニコルなどの広告キャラクターも務め、世界中のショーウィンドーを小夜子のマネキンが飾ったといわれる。また、80 年代にかけて「パフォーミング・アーツ」としての側面をますます強めていく山本寛斎のショーでは、パフォーマーとしてだけではなく、ポスター画、舞台イメージ図の制作や、ヘア＆メーキャップのデザインを担当するなど、後年の活動へつながるクリエイターとしての片鱗を見せている（pp.82-83）。